

## 万葉学者のあるべき姿

島根県西部（石見国）には、柿本人麻呂が訪れたという伝承地が多い。それもこれもほとんどが万葉歌がらみである。

人麻呂と石見国でよく知られた歌と言えば、石見相聞歌群（巻第二の一三一一～一四〇番歌）と呼ばれる一群であろう。歌をみると、たしかに石見のことがよまれている。一般的には、人麻呂が国司などの派遣官として石見国に行つたのを契機に歌がよまれたと言われているが、その証拠は何もない。

しかも、石見に縁が深いことを示す歌は他にもあり、そうした状況が万葉学者の想像を駆り立て、じつに多くの諸説が展開されている。

『万葉集』巻第二の二二三番歌には「柿本朝臣人麿の石見国に在りて臨死



女良谷川（上流に鴨山がある）

らむとせし時に、自ら傷みて作れる歌一首」として次のような歌を載せる。

鴨山の 岩根し枕ける われをかも  
知らにと妹が 待ちつつあるらむ

人麻呂が石見国で亡くなったというのはよい。だが、この「鴨山」が一体どこかという論争が古くから絶えない。この点に最も精力を注いだのは、医者であり歌人でもある斎藤茂吉である。茂吉は足繁く石見を訪れ、最初の踏査から足かけ七年にも及んで、つい

に「鴨山」を発見する。邑智郡粕淵村大字湯抱（現在の邑智郡美郷町湯抱）に「鴨山」を比定した。鴨山の眼下には、女良谷川（湯抱川）という清流が流れている。

実際「鴨山」がこの場所でのいか判断しかねるが、それより私は茂吉がこの山奥の地に何度も訪れ、地元の人ですらめつたに通らない道をひた歩き、人麻呂の足跡を辿ることに情熱を燃やしたこの姿勢にこそ敬意を表したい。

鴨山の近くには、人麻呂歌集中の「浮沼池」（巻第七の一四九番歌）の比定地、浮布池もある。鴨山から浮布池間は、等高線の間隔が狭く、とても安全な道とは言えない。これを躊躇せずつき進んだのが茂吉である。たかだか万葉歌一首のために、今の万葉学者はここまでできるだろうか。いや、それほど万葉歌には魅力があると考えるべきか。

（万葉古代学研究所主任研究員・竹本晃）